

「江刺しの稲」とは用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。全く管理されないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な生長を見せている。「江刺しの稲」の存在は我われに何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

耕しくむびぬ(耘)るゝと

本誌編集長
昆 吉則

辞典で「耕耘(こううん)」という言葉を引くと、「耕」は「耕す」こと、そして「耘」の字は「くさぎさる」と読み、その字義は「草切る」「草を取る」とだとなる。すなわち「耕耘」とは「耕し耘ること」「耕して雑草を取り除くこと」という意味なのである。また、「耕す」という言葉は「たがえず(田返す)」の音が転じたもので、「田を返す」こと「土を反転」することであるらしい。

「耕し耘る」ことであればこそ、単に土を軟らかくするだけでなく、「たがえず(田返す)」のような面倒なことを人はしてきたのだ。

緻による二段耕の意味

4号の経営者ルポで紹介した高松求さんにお聞きしたことがある。高松さんが新米の百姓だったころに教えられた、緻で二段耕にする「耕し方」に込められた意味を、近年、プラウを使うようになって改めて気づかれたといっておられた。

かつての緻による二段耕は、草の繁茂を抑え、ポッコリと土を反転していくことで風乾効果を最大限に生かして、軟らかい土層を形成していく。プラウを使うようになって、二段耕がもっていた耕すことの意味を改め

て知ったというのである。

肝心なことは、高松さんの畑や水田は、普通の人より除草剤の使用が少なく、しかも手間も抜けて良い作を得ているのだ。いつのまにか、我われは「耕す」ことを、単に「土を軟らかくする」という意味にしか意識しなくなってきた。種をまき、苗を植えるという、その場の必要でしか作業の意味を考えなくなってしまう。実は、そのために後から余計な手間や費用がかかり、さらには作物が育つ環境を壊してしまうようなことをしているのではないか。

「種をまく」という今の必要ばかりにとらわれて、「草を減らす」という明日への手だてを見逃してしまっているのではないか。

「上農は草を見ずして草を取る」とは、多分このことをいっているのだと思う。

むしろ、現代のような便利な手段が使えなかった時代に、人は現代よりはるかに想像力を働かせ、個々の手段や道具あるいはそれによる作業、仕事の持つ意味を、そして自然の力を、深く理解していた。科学の知識はなくとも経験が知恵としての農法を作り出していった。それは習慣の中に込められ、農を営むもの、生きる者のわきまえとしてしつけられ、受け継がれてきた。

とかく我われは、現代の技術手段と比べて、かつての農法は苦役のうえに成り立っていたという側面ばかり見てしまう。確かに、現代の農業の労働生産性は向上

した。化学肥料や農薬という濃縮された技術手段を我われは得た。

しかし、自然というシステム、あるいは自然という無人工場を利用するという農業の意味とそのやり方は、昔も今も、基本的には何も変わっていないのだ。むしろ、さまざまな技術や制度を持った分だけ、人の振る舞いとしては愚かなものになってきているのかもしれない。せいぜい、少しばかり小賢しく自然や社会に対して傲慢になっただけなのではないか。

不耕起栽培と経営

いわゆる「不耕起栽培」というものがよく話題になる。僕のたくさんの友人たちも「結構、面白いぞ」と取り組んでおられる。また、その農法開発にかけてこられた方の解説などを讀んだり聞いたりすると、確かに深い自然への洞察と実践の積み重ねの中でその農法を実現されたのだな、ということがよく分かる。

僕は農業をしたこともないし、その専門家でもないわけだから語る資格はないかもしれないが、「不耕起栽培」は「技術」としては非常に面白い可能性のあるものだが、現段階で「経営」として成立するのであろうか、と疑問に思っている。むしろ、その前に問うことはないのかと考える。

もちろん、語られる「不耕起農法」の本質とは、単に耕起作業を省略して手が抜けるなどという後ろ向きなことではないという前提である。むしろ創刊号の

本欄で書いた「江刺しの稲」の素晴らしさを引き出すことにつながる農法だとも思える。

人がやっている作業を見る限りでの話ですが、結論から言えば、耕さずに稲を作ることを「経営」として行うのは「難しすぎる」のではないのか。その開発者は除草剤も使わないという。それも有り得るだろう。しかし、多くの友人たちは、除草剤の使い方次第でやれないこともないが、同じ田で毎年やっていくとなると除草剤への依存度が高まり、問題もあると聞いた。

経営の手段としての「技術」は、なるべく易しく簡単にできるものでなければならぬ。それは作業を省略するという意味ではない。「耕し耘る」ことを確実にやる方法の方が、それをしないより誰にでもできる易しい技術ではないかということだ。むしろ「不耕起」にしたためにより多くの除草剤を使わなければならないのなら、それはもとより「不耕起農法」論者が語る文脈とは違ってしまふであろう。

ただし、僕は自分でやって書いているわけではない。やってみる価値はあるのだから。ただ、その時「不耕起」に対する「耕起」——田返していたか、耕し耘ることをしていたか？——が、それまでどのようにになされ、耕起したことによって生じる障害、そもそも農業を行うことによる障害の回避をどのように行ってきたか、を反省して語られるべきだと思う。人が「耕し続けてきたこと」の意味とは、それくらいに深いのではないだろうか。